



二度にわたるアメリカ放浪で、真に歴史にかかわった意味でのビートニク運動、そしてヒッピーの展開の中心部に迫ったものは、誰か。桜井孝身である。

中央の、地方に対する構造的圧制に立ち向い、地方が地方なるがゆえに潜めているエネルギーを爆発的に顕在化させたものは、誰か。桜井孝身である。

フランスに渡り、孤軍奮闘しつつ一流画廊との契約に成功し、在パリの世界の画家と伍して国際的評価に耐える地歩を築きつつある者は、誰か。桜井孝身である。

この桜井孝身が、友人知己から感嘆の目で眺められるのは、けだし当然のことといえよう。だがしかし、それらの軌跡のすべてを含め、絵画芸術として自立するところに、なお、桜井孝身の絵は存しているか否か。この問いに答えきれなければ、画家桜井孝身は究極においてむなしい。

桜井の行動力あるいは人間的魅力について語る賛辞の二重性が、ここに出てくる。画家桜井孝身が、どのように行動的であり人間的 魅力に富んでいようとも、その創造する絵画世界が正しく受け止められ、絵画としての高さこそが理解されなければ、桜井孝身はむなしい。行動力や人間的魅力について語る言葉は、桜井の絵に対する暗黙の拒否を示しているのではなからうか — それが私の疑惑なのである。私は、桜井の人間的側面を声高に語ることを止めよう。ひたすら、彼の絵を前にして、作品の内奥を語っていこう。